# KFAW 台湾スタディツアー2017

# 「台湾に学ぶ女性のエンパワーメント」

**報告書**

平成 30 年 3 月

公益財団法人
アジア女性交流・研究フォーラム
KFAW KITAKYUSHU FORUM ON ASIAN WOMEN

# 目次

1　はじめに・・・1

(1)　視察の目的

(2)　スケジュール

2　台湾の概要・・・2

3　台湾の概要及び日本と台湾の関係について・・・3

(1)　日台交流の現状

(2)　台湾情勢（内政、両岸関係・対外関係、対日関係）

4　台湾女性のエンパエンパワーメントの歴史と現在の課題・・・4

(1)　台湾女性のエンパワーメントの歴史

(2)　婦女新知基金会の目指すもの

(3)　台湾国家婦女館の役割

(4)　現在の台湾女性をめぐる課題

5　台湾女性をサポートする仕組みー育児・介護施設を訪問してー・・・6

(1)　臺中市公設民營清水托嬰中心

(2)　永信松柏園老人養護中心

参加者コラム

6　台湾の働く女性たちについて～台湾の働く女性たちとの懇談会・・・10

参加者コラム

7　台湾視察を終えて　アジア女性交流・研究フォーラム理事長　堀内光子・・・14

8　参加者コラム・・・16

9　感謝の言葉・・・21

# １　はじめに

## （１）視察の目的

日本では女性活躍の機運が高まっていますが、2017 年の世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数は 144 カ国中 114 位で、特に政治・経済分野での女性参加は依然として低いままです。一方台湾では、クォータ制の導入により女性議員の割合は大きく増加し、2016 年には初の女性総統が誕生しました。また、経済面においても、2016 年の台湾の企業全体に占める女性経営者の割合は過去最高の 36.2%に達しています。

このような台湾女性たちの活躍はどのように成し遂げられてきたのでしょうか。そして働く女性たちを支える仕組みはどうなっているのでしょうか。

今回 KFAW は、台湾の女性センター、NGO、高齢者施設、保育所などを訪問し、働く女性たちと懇談し、台湾女性の活躍の背景を探るとともに、両国の女性を取り巻く課題について考え、日本の男女共同参画社会実現のためのヒントを得るため、スタディツアーを実施しました。

## （２）スケジュール

期間：平成３０年１月１７日（水）～１月２０日（土）　３泊４日

| 日 | | 行程 | 宿泊 |
|---|---|---|---|
| 1/17<br>(水) | 9:00<br>10:55<br>12:35<br>午後<br>19:00 | 福岡空港国際線集合<br>福岡空港発<br>台北桃園空港着<br>日本台湾交流協会　台北事務所訪問<br>【オプショナルツアー】台北市内視察 | 兄弟大飯店(台北市) |
| 1/18<br>(木) | 午前<br>午後<br><br>夜 | 台湾国家婦女館訪問<br>婦女新知基金会訪問<br>台湾高速鉄道で台中に移動<br>台湾 BPW との懇談会 | 全国大飯店(台中市) |
| 1/19<br>(金) | 午前<br><br>午後 | 保育所見学<br>高齢者施設見学<br>台中 BPW との懇談会<br>台湾高速鉄道で台北へ移動<br>九份・十份視察 | 兄弟大飯店(台北市) |
| 1/20<br>(土) | 午前<br><br>16:30<br>19:35 | フリータイム<br>【オプショナルツアー】台北市内視察<br>台北桃園空港発<br>福岡空港着 | |

## ２　台湾の概要

**【基本情報】**

| | |
|---|---|
| 面積 | 36,191平方km　※九州は42,000平方km |
| 人口(2016年7月) | 2,351万人 |
| 民族 | 漢民族(98%)、16の原住民系民族(2%) |
| 主要言語 | 中国語、台湾語、客家語、その他原住民の言語 |
| 宗教 | 仏教、道教、キリスト教 |
| GDP(2016年) | 5,305.3億ﾄﾞﾙ |
| GDP成長率(2017年) | 2.58% |
| 一人当たりGDP(2017年) | 24,269ドル(推定値) |
| 主要産業 | 電気・電子、鉄鋼金属、繊維、精密機械 |

主な台湾企業
鴻海精密工業(HONHAI Precision Industry)、宏達国際電子(HTC)、廣達電脳(QUANTA)、宏碁電脳(ACER)、華碩電脳(ASUS)、台湾積体電路製造(TSMC)、聯華電子(UMC)、捷安特自転車(GIANT)

**【政治体制】**

| | |
|---|---|
| 与党 | 民主進歩党(民進党)<br>※最大野党は中国国民党(KMT) |
| 議会制度 | 一院制(立法委員定数113、任期4年) |

主な指導者
総　　統　蔡英文(さい・えいぶん:Tsai, Ying-wen )
　　- 総統は直接選挙にて選出(任期4年:再選1回まで)
副 総 統　陳建仁 (ちん・けんじん:Chen Chien-Jen)
行政院長　頼清徳(らい・せいとく:William Lai)　- 行政院長は総統が任命
外交部長　李大維(り・たいい: David Tawei Lee)
立法院長　蘇嘉全(そ・かぜん:SU, Jia-chyuan)

**(日本台湾交流協会訪問時の配布資料より抜粋)**

**【台湾の歴史】**

17－19 世紀　　オランダ、スペイン、清等の統治下におかれる。
1895-1945　　日清戦争の下関条約により、日本の支配下におかれる。
1945 年　　日本は敗戦し、台湾の行政権を(大陸から渡ってきた)中華民国軍(中国国民党)に委譲。中華民国は台湾を編入。蒋介石が初代総統。
1947 年　　二・二八事件(国民党が台湾の人々を弾圧)。白色テロ(為政者によって政治的敵対勢力に対して行われる暴力)の開始
1949 年　　10 月 1 日に国共内戦で勝利した中国共産党が中華人民共和国を樹立。「中国を代表する正統な政府」としての権利を巡り、国民党政府と対立。台湾の主権帰属も対立の要因に。
1949 年　　台湾で戒厳令しかれる。
1952年　8 月　　日華平和条約(日本と中華民国との間の条約、1972 年 9 月に失効。)
1971年　　中華民国は国際連合における「中国の国家」としての代表権を喪失。
1972年　9 月　　日中共同声明(日本と中華人民共和国の国交正常化)、日中平和友好条約締結
1986 年　9 月　　戦後初の野党、民進党成立
1987 年　　台湾の戒厳令解除、民主化が進む。李登輝が副総統
2000 年　　民進党の陳水扁が総統に当選
2008 年　　国民党の馬英九が総統に当選、中国との三通(通商、通航、通郵)が一部を除き実現。
2016 年　　民進党の蔡英文が初の女性総統となる

**(事前勉強会講師　福岡女子大学　宮崎聖子教授作成資料より抜粋)**

## ３　台湾の概要及び日本と台湾の関係について

**【日本台湾交流協会　台北事務所】**

### （１）日台交流の現状

日本と台湾の間には外交関係はありませんが、経済、文化、人物等民間レベルで深い交流を行っています。2016 年の人的相互交流は 600 万人を突破し、過去最高を更新しました。中でも、2009 年に開始した日台間のワーキング・ホリディ制度は多くの学生に利用されています。自治体間では、2011 年の東日本大震災を契機に日台間の絆が深まり、姉妹（友好）交流都市提携が進み、その数は 78 組に達しました。その他鉄道、マラソン、サイクリング等特定の分野でも連携が進んでいます。航空路線も拡大傾向で、北九州空港からもスターフライヤーが北九州―台北便の就航を予定しています。2016 年の台湾での世論調査でも、8 割が日本に親しみを感じており、民意は良好です。

### （２）台湾情勢

#### ①　内政

台湾では、2016 年総統選挙において蔡英文氏が初当選し、第 14 代総統に就任しました。台湾史上初の女性総統です。立法院においても与党である民進党が過半数を占めており、蔡英文政権は、民進党完全執政の元、向かうべき 12 の挑戦を掲げ、年金制度改革など大々的な政策に着手しています。総統のパフォーマンスに対する台湾の人々の満足度調査結果からは常に高い支持率を保っているとは言えませんが、人々は年金改革には一定の理解を示していると考えられます。

**渉外室　専門研究員　大磯氏（左）と**
**経済・貿易相談室兼文化室主任　水之江氏（右）**

#### ②　両岸関係・対外関係

台湾は、両岸関係（中国との関係）、対外関係のいずれにおいても非常に難しい立場に置かれています。特に、民進党政権発足後は、中国と台湾の両岸政策の認識は一致せず、両者の関係は冷え込んでいます。そのため中国から台湾への人的往来も激減しました。経済的には、かつて台湾は過度に中国に輸出を依存していましたが、現在は東南・南アジア諸国への切り替えを進めています。台湾が外交関係を有するのは小国を中心とした 20 カ国です。2017 年 6 月にはそれまで国交を有していたパナマが台湾と国交を断絶し、中華人民共和国と国交を回復するなど厳しい状況に置かれています。

#### ③　対日関係

日台間にも課題があります。まず、福島県等 5 県産の日本産食品の輸入規制は、台湾の与野党間の政治問題の争点になっており、台湾の人達が納得する地道な説明が必要です。次に沖ノ鳥島周辺海域をめぐる問題があります。この地域は台湾の伝統的な漁業地域だったため、排他的経済水域の関係上、台湾側は島ではなく岩であると主張しています。3 つ目は慰安婦問題です。2015 年慰安婦に関する日韓合意がなされましたが、台湾にも 42 名の慰安婦が存在し、日本に対して問題解決にむけた協議を要求しています。このような課題はありますが、台湾は日本にとって極めて重要なパートナーです。

**台湾交流協会　台北事務所　概要**：1972 年の日中国交正常化に伴い、外務省・通商産業省（当時）の認可を受け設立されました。日本政府との緊密な連携の下、外交関係のない台湾との実務関係を処理するため、日本の在外公館が行う業務（邦人保護、査証発給、経済・文化交流など）を台湾にて展開しています。現在、日本人約 40 名（外務省、経産省等、ジェトロ、県庁派遣（福岡県、愛媛県）、専門調査員等）、現地スタッフ約 40 名の計 80 名程度のスタッフが駐在しています。

## ４　台湾女性のエンパワーメントの歴史と現在の課題

### 【婦女新知基金会、台湾国家婦女館】

#### （１）台湾女性のエンパワーメントの歴史　～自らの手で変革を～

1996 年以前は台湾女性の地位は低いものでした。1970 年代まで続いた養女制度は、女児を使用人のように扱うことも多く、中には虐待に至るケースもありました。台湾社会が家庭内暴力の問題を直視し始めたのは、1993 年、長い間ひどい暴力を受けていた妻が夫を殺害した事件が起こった時でした。その後社会の関心が高まり DV 反対運動がおこり、DV 防止法等が成立しました。

女性の教育のレベルが高まるにつれて、女性の労働市場への参入が進みましたが、そこには女性労働者への不公平な待遇が存在していました。1987 年、国父記念館で働いていた女性が結婚を理由に退職を強要されるという事件が起きました。当時の台湾では女性が結婚する、または 30 歳になると退職を勧告されていたのです。このような職場におけるジェンダー不平等の問題に立ち向かっていったのが、女性の研究者や活動家たちです。この事件がきっかけとなり、多くの人々が女性の権利を守るための社会運動に参加しました。特に、今回訪問した婦女新知基金会のメンバーは、この問題をあらゆる職場における問題として認識し、1989 年から職場内のジェンダー平等に関する法制化に取り組みました。そして、この法律は 2001 年に両性工作平等法として成立し、2002 年に施行されました。

また、婦女新知基金会は、学校教育の現場における性的マイノリティへの差別に対する取り組みも行いました。2000 年に「女性っぽい」といじめられていた中学生の男子は、皆と同じ時間にトイレに行くとパンツを下げられる等の虐待にあうため、授業中 1 人でトイレに行くことを学校から許可されていました。しかし、ある日この男子生徒はトイレで遺体で発見されました。この事件を契機に、婦女新知基金会は、学校教育のカリキュラムにジェンダー平等、性の多様性を学ぶことを義務付ける法律の制定を働きかけ、2004 年両性平等教育法の制定に至りました。

#### （２）婦女新知基金会の目指すもの　～政府へのプレッシャーを～

婦女新知基金会の活動は法律の制定にとどまりません。その後の法律の実施についてのリサーチや監督等に及びます。例えば、政府が政策を立案する際に女性の権利を守っているかどうか、各地方での女性の権益委員会の活動が適切かどうか、選挙時の候補者の公約が守られているかどうかなどについて、常に監視の目を向け、改善のための手段を講じています。

秘書長　覃玉蓉氏（右）

ここで、秘書長（事務局長）の覃玉蓉氏のコメントを紹介します。「台湾のジェンダー平等の達成には、私たち民間団体が協力して、法律立案、ロビー活動、モニタリング、教育等を通じて、常に政府に（協力関係だけではなく）プレッシャーを掛け続けていくことが必要であると考えています。」

このようにして、台湾におけるジェンダー平等の取り組みは進展し、今では立法院における女性議員の比率も高く、地方でも女性の政治参加は進んでいます。また、現在総統が政権の重要なポジションに女性職員を登用し始めており、今後は政府の要職でも女性の進出が増えることが予想されます。

## （３）台湾国家婦女館の役割　～政府と市民の架け橋に～

台湾国家婦女館は、2008 年 3 月に女性権益促進委員会により設置された台湾の女性センターの中心的組織で、その役割は政府と市民社会の架け橋として連携を進めることです。台湾では、台湾国家婦女館の他、ジェンダー平等を取り扱う部署として行政院に性別平等省、各県に女性センターがあります。各地方政府には官民の委員で構成される女性権益促進委員会があります。国家婦女館の理事は政府の各部長で構成され、政府が作った政策を地域の女性センターや民間にどのように理解・浸透させるのかについて提案し、教育や人材育成を進めています。

台湾国家婦女館のジェンダーギャラリー

台湾では地域によって文化が違うので、各地域にあったやり方を提案する必要があります。例えば、沿岸部地方の女性にはどのような教育が必要で、どのような面で力を発揮できるかなど個別具体的に提案していきます。また、人々に男女共同参画意識の浸透を働きかけています。男性への啓発も、上からの押し付けではなく、生活に密着した具体的な事例を挙げて発信しています。積極的に海外の優良事例を導入して台湾でも活用したいと考えています。

## （４）現在の台湾女性をめぐる課題～経済的自立、外国人労働者そして先住民（原住民）女性～

経済面においても台湾女性の進出は進み共働き家庭が増えましたが、台湾国家婦女館では、さらに台湾女性が経済的に自立し、能力を発揮できるようになるための取り組みを進めています。その中の一つが、毎年テーマを設定して開催している展示会です。2017 年のテーマは「女性と仕事」です。女性が独立して生活するうえで、その経済保障は大切だからです。今回の展示会では、1960 年代から現在に至るまで台湾女性が担ってきた経済的役割や今後の課題を発信しました。

現在、台湾は高齢化社会に入り、インドネシアなどの外国人労働者を雇用して、家庭の介護を担ってもらっています。約 26 万といわれる外国人労働者は、生活習慣も食物も違うため、家庭内でのトラブルや雇用者による虐待等が発生しています。また、外国籍配偶者も増えており、ハーフの子どもも増えています。どのようにして彼らの法的権益を確立するのかが課題になってきています。

研究員　陳羿谷氏

同じく、先住民（原住民）女性を取り巻く問題についても大きな関心を持っています。先住民（原住民）女性は長い間台湾の主流社会から周縁化され、経済的、社会的に不利な立場に置かれてきました。しかし彼女らは文化・芸術面で優れた技術を持っています。その特性を生かすためにも、台湾国家婦女館では、先住民（原住民）の工芸品や手芸品の技術を現在の技術と融合するサポートを行っています。

**婦女新知基金会概要**：1982 年に女性の権利に関する雑誌を出版する出版社としてスタートし、現在に至るまで女性の権利擁護を目指して活動している歴史のある NGO です。主な活動は、家庭内における性別平等、職場におけるジェンダー平等、女性の政治参加の提唱、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ、女性のエンパワーメント、多文化民族教育などです。運営体制は、理事・監事 18 名、フルタイム職員 7 名、ボランティアの相談員 19 名で、運営資金は寄付や宝くじの収益配分等で構成されています。

**台湾国家婦女館概要**：2008 年 3 月に女性権益促進委員会により設置された台湾の女性センターの中心的組織で、女性権益促進開発基金（1998 年設置）が運営しています。ジェンダー主流化政策の下、NGO の参加の促進、台湾の女性団体の橋渡し、台湾女性の権利の主張やジェンダー平等を目指した活動を行っています。
**施設概要**：展示エリア（女性起業家作品）、ジェンダーギャラリー、託児室、親子休憩室、図書室、会議室等

## ５　台湾女性をサポートする仕組み

### ―育児・介護施設を訪問して―

**（１）臺中市公設民營清水托嬰中心訪問　～台中の共働き家庭のために～**

臺中市公設民營清水托嬰中心は、台中市社会局が共働き夫婦の負担を軽減するために設置した市内 4 番目の公営保育所です。元々は民間団体が老人ホームを運営していましたが、閉鎖後の 2011 年、台中市が地域福祉の包括的サービスを展開するためにリニューアルしました。１F に育児センター、地域の高齢者が利用する食堂、障害者・認知症を対象としたデイサービスセンター、地域の高齢者のための生涯学習教室、２F に老人ホーム、小規模多機能ホームがあり、高齢者と乳幼児が触れ合える環境になっています。

開所は月曜日から金曜日の午前 8 時から午後 6 時で、延長対応もあります（無料）。料金は月額 7000 元（約 26,000 円）です。定員は 28 人、保育士は 7 名、職員は 2 名、調理師 1 名、医療と連携しており、ナースもいます。保育士の資格は、高卒で 160 時間の訓練を受け国家試験をパスした人が取得できます。ただし日本と同様に、重労働、低賃金のため台湾でも離職率の高さが問題となっています。

台湾の託児システムは、幼稚園と保育所に分かれています。幼稚園は教育を目的とするもので 2 歳から 6 歳までの子どもを対象とし、保育所は生後 1 ヶ月から 3 歳までの子どもを対象とします。ここでは生後 1 ヶ月から 2 歳までの子どもを預かっています。台湾の保育所には公営と私立があり、公営に入るのは原則登録順です。ただし低収入家庭、多子家庭、シングルマザー等の優先条件があります。臺中市公設民營清水托嬰中心は、台中市が共働き夫婦のために設置したものなので、母親は全員働いており、専業主婦はいません。母親の職業は、公務員、企業の雇用者、自営業などです。台湾では、一旦仕事を離れたら職場に戻ることは容易ではないとのことです。また経済的理由から母親も働く必要がある家庭が多く、公営保育所はそのような母親たちが働き続けられることを目的として設置されているのです。

また、約 26 万人といわれる外国人労働者は、施設勤務者が半分、個人宅勤務が半分です。個人宅で働く外国人労働者はたいてい介護と育児の両方を担いますが、外国人労働者は保育施設には勤務することはできず、介護施設のみで働いています。

公設育児所で唯一の最新式の運動用浴槽
週１回、1～9 ヶ月までの子ども達が利用

理事長　蒋叔融氏（左）と
利用者の祖母（中央）、母親（右）

海をテーマに海底を冒険しているような気分が味わえる館内

## （２）永信松柏園老人養護中心　～皆が尊厳のある暮らしを～

日本と同様に高齢化が進む台湾では、1992 年から導入された高齢者・障害者向け外国人家事労働者の雇用と長期介護サービス法に基づくサービスの提供が行われています。さらに台湾全土に設置された高齢者センターによる健康促進・予防・社会参加なども盛んで、家族、コミュニティー、政府のそれぞれが高齢者ケアの担い手となっているといえます（2017 年度実施「アジア女性会議-北九州」安里和晃氏の基調講演より）。今回は、その中でも、ホームケア、ディケアを中心とする老人養護施設、永信松柏園老人養護中心を訪問しました。

ここは 1978 年に設置され、永信社会福利基金会が運営する老人養護施設です。永信社会福利基金会は、元々は製薬会社で、日本にも子会社永信製薬があります。創業者は日本に留学しており、帰国後老人養護施設開業に着手しました。何回も日本に勉強しに行き、2001 年に開業したそうです。

この施設は、台湾で初めて日本の養護施設を参考にしてできた施設で、台中市でホームケア、ディケア、訪問入浴、認知症グループホーム、小規模多機能型居宅介護を行っています。定員は 161 名で、2 人部屋（月額 32,000 元（約 118,400 円））と 3 人部屋（月額 30,800 元（約 113,960 円））があります。職員数は 98 名で、ほとんどが介護士、看護士、ソーシャルワーカー、調理師等の専門職です。また、2 年前に在宅入浴サービス車の提供を始めました（利用料は 1 回につき 1,500 元（約 5,550 円））。この施設は特に高収入者を対象としているわけではなく、低中収入者には政府から補助があります。

執行長　趙明明氏

サービスを提供するに当たり、施設が目指しているのは、皆が尊厳を持って暮らしていくことです。そのために、入居者の生活面でよいアイディアがあれば、日本に勉強に行き、その知識と経験を持ち帰り実践しているとのことです。

全体説明

施設外観

**【参加者コラム】**

## 台湾のジェンダー平等の光と影

## ―台湾の家族主義的福祉を支える外国人家事介護労働者

北九州市立大学　教授　河嶋　静代

### 台湾のジェンダーギャップ指数

台湾は女性総統の誕生、脱原発と再生可能エネルギー政策、女性の政治参画を進めるジェンダー・クォータ制度、同性婚の立法化が予定されるなど、近年、アジアの中でも注目されている国である。台湾における2016年のジェンダーギャップ指数は、世界144カ所中38位と日本よりランクが高い。しかし、今回のスタディツアーではそんな華々しい台湾の陰の部分、女性の共働き化を支える外国人家事介護労働者の問題に目を向けさせられた。

一部の外国人家事介護労働者の“貢献”の上に成り立つ台湾の女性たちがけん引するジェンダー平等をどうとらえるのか。外国人家事介護労働者の問題は、東アジアの家族主義的福祉の国、シンガポール、香港などでも同様に顕在化しており、「育児や介護の社会化」（市場化＝商品化）することで対応しようとしてきた国に特に顕著に見られるように思う。

日本でも介護労働者人材不足をめぐって、EPA(経済連携協定)で外国人介護労働者の導入や、働く女性を支援するために国家戦略特区で外国人家事労働者の試験的導入を打ち出している。台湾の外国人家事介護労働者の問題は、ジェンダーの問題や福祉の在り方を考える上でも重要な課題を内包していると思う。

### 外国人家事介護労働者と介護保険の導入

台湾の女性の労働力率は従来のM字型カーブから、近年、女性の高学歴化が進み、結婚後も仕事を辞めず定年まで働き続ける女性が増え山型に移行している。台湾の共働き化に貢献しているのが、20数万人といわれる外国人家事介護労働者である。台湾での外国人家事介護労働者の導入は、女性の労働力化を進めるために1990年代初頭に始まった。海外から外国人家事介護労働者を導入することで女性の就労が促進され、今日の台湾の女性の社会的・経済的地位の向上に繋がったものと考える。

それに対して日本の場合は、近年、共働き化の増大により、女性の労働力率は結婚・出産期に当たる年代に低下し、育児が落ち着いた時期に再び上昇するという M字カーブの谷の部分が浅くなってきているが、依然、主な稼ぎ手は男性で女性は補助的な仕事を担いつつ、家事・育児などのアンペイドワークを引き受けるという性役割分業が維持されているため、ジェンダーギャップ指数の世界ランクも劣位（2017年、114位）である。

台湾では、2018年の介護保険の導入により、住み込みの外国人家事介護労働者を段階的に抑制し、計画的に育成した台湾人ホームヘルパーに置き換えるという方針を打ち出している。しかし、台湾人自身は介護者として働くことの魅力を感じておらず、これまでと同様、外国人家事介護労働者に頼らざるを得ないのではという見方や、介護保険の利用よりも外国人家事労働者を雇う方が安いため、その需要は減らないだろうと、介護保険の普及を懸念する声もある。

彼女たちは住み込みで働き、介護だけではなく家事や育児も行う。最低賃金以下で一日十数時間も稼働するという過酷な状態に置かれているが、労働基準法の適用外であり、失踪する労働者も多いという。密室の中で生じるパワハラ、セクハラ、性暴力などの被害や、児童、高齢者、障害者への虐待などの加害も発生しており社会問題になっている。

## ケアワークをめぐる女性間の性役割分業とジェンダー不平等

世界の福祉国家は、福祉は誰が供給するのか、国家、市場、家族などその供給の配分によって、国家の福祉類型が特徴づけられる。

日本は、家族や地域による自助や共助を重視する福祉であるが、2000 年に介護保険を施行、社会保険の仕組みにより、家庭内で私的に対応していたケアを外部化、社会化することで家族による介護負担の軽減が図られた。

福祉先進国のスウェーデンでは介護や保育を社会化し、貧富の格差なく利用できる公共サービスとして提供される。男性も女性も育児休業を取ることで子育てをパートナーと共に担うような政策をワーク・ライフ・バランスにより推進している。男並みに女性が働くのではなく男性の働き方を女性に近づけることで、男性も家事や育児を担えるように労働時間を抑え余暇を重視し、家庭内の性役割分業の是正が図られている。

一方、台湾では“親の介護は家庭で”という家族主義が強いので、外国人家事介護労働者の利用が浸透し、介護の社会化が遅れた。

介護や保育などのケアワークは、従来女性が家庭でしてきたアンペイドワークであり、知識や技術が要らず、誰でもできるものと捉えられ報酬も低い。ケアの一部の領域では外部化され、フォーマル化し看護師、保育士、介護福祉士など専門職化した部分があるが、女性の割合が多く、依然、知識や技術がなくてもできるとの見方は払しょくされず、３K 労働と敬遠され、「ケアの女性化」や「貧困の女性化」に連なる問題を抱えている。

外国人家事介護労働者の導入は、受け入れ国の台湾の共働き化を支えているが、送り出し国では母国に子どもを置いて出稼ぎする女性も多く、“留守児童”の世話を親族にまかせたり、母国の労働コストの低い地域から家事介護労働者を雇うなど、ケア労働は国境を越え、労働コストの低い地域から高い地域へ流動化し国際的な分業化がみられる。

こうした状況を鑑みると、家庭内の性役割分業はパートナー間では是正されておらず、労働コストの高い国の女性が低い国の家事介護労働者を雇用することで解消しようとし、雇う側、雇われる側の女性間でのケアワークの分業化がなされている。外国人家事介護労働者が家事・育児・介護を担うことで、受け入れ国の女性は男性並みに働き、経済的・社会的地位を向上させ、その結果、男女格差が縮小される。しかし、雇われる側の女性の劣位状況は受け入れ国のジェンダーギャップ指数には反映されていない。本来ジェンダー不平等の問題は、男女間格差の問題だが、こうした構造を見る限り、性役割分業の偏在や経済格差は女性間にも存在する。台湾の福祉のあり方、そしてジェンダー政策のあり方が、女性間のジェンダー不平等を強化する方向に働くのか否か、今後の動向に注視したい。

台湾国家婦女館に張られていたポスター

## ６　台湾の働く女性たちについて

### ～台湾の働く女性たち（台湾 BPW クラブ）との懇談会

（１）　**訪問日時**：１月１８日（木）19：30～21：00
**対応者**：總會長　潘慧如氏他 12 名
**訪問先概要**：BPW International(BPWI)は、世界 100 カ国あまりの国と地域が参加する国際組織で、国連で重要な役割を持つ NGO。台湾 BPW から 13 名の会員が参加し、4 テーブルに分かれ懇談会を開催しました。それぞれのテーブルでは、自らの仕事や家庭等について懇談しました。

（２）　**訪問日時：**１月１９日（金）12：15～13：15
**対応者：**大台中分會長　郭壽珍氏他 7 名、台中市市議会議員 2 名
**訪問先概要：**台中 BPW 会員 8 名と台中市議会議員 2 名が参加し、ビュッフェ方式で歓談しました。

台湾 BPW 潘慧如總會長（右）
と記念品交換

台中 BPW の皆さんと歓談

永信松柏園老人養護中心で
台中 BPW の皆さんと記念写真

**【参加者コラム（日本 BPW 北九州クラブ)】**

### 台湾国家婦女館での映像　呂秀蓮氏のこと

初日（17 日）に日本台湾交流協会台北事務所を訪れ、台湾の概要と、日本と台湾の関係等を日本語でお聞きできたことはその後のツアーに良い作用をもたらした。フォーラムの方々の配慮がうかがえ感謝でした。

翌日（18 日）の台湾国家婦女館では、映像を見ながら主として女性進出の発展史を解説されたが、その映像に呂秀蓮氏（台湾の元副総統で BPW の創始者）が何回も登場した。実は 2016 年 12 月に呂氏を拝見していたが、あの映像はモノクロでぼんやりとしていたうえ、ご本人は若かりし頃のお顔であったため、直ぐに判明できませんでした。2016 年、BPW 台中クラブの会長交代の式典に参列した時、定刻に遅れて到着される呂氏を待ち、盛大にしかも厳粛にかつ大いなる敬意をもって迎えていた台中クラブの会員の表情が思い出される。なるほどそういう人物だったのかと映像で理解できました。

2017 年６月には桃園にある呂氏の文物館（博物館のこと）を訪れ、お茶もいただいた。その文物館では直接ご説明をなさった。今でも記憶に残っているのは、彼女が６年間、牢獄生活を送られたということです。女性の権利獲得のために体を張って活動なさったのです。

国家婦女館は 2008 年に女性権利委員会により設置され、台湾女性センターの中心であると伺っているが、女性権益促進委員会の理事長を呂氏がなさっている。台湾女性の権利の主張やジエンダー平等を目指して更なるご活躍を祈るばかりである。また、彼女に続く女性が輩出されるようにと願う。牢獄での生活はしないで済むようにと強く思う。台湾の自由思想が保たれ、親日感情も維持されるようにと切に願わずにおれない。

日本 BPW 北九州クラブ副会長　黒岩　英子

## 台湾 BPW クラブとの交流会について

スタディツアーで台湾の働く女性の現状を知る目的で、BPW 台湾クラブとの交流会が設けられました。日本 BPW 北九州クラブは、2016 年に台湾クラブの 1 クラブである、台中クラブとツィニングを行い、交流を開始いたしました。お互いのクラブを訪問し、親交を深める中で台中クラブの皆様のホスピタリティに感激、感動をしておりました。今回、空港に台中クラブの会長である KOU SHOU CHEN さんのチャーミングな笑顔のお迎えを受け、それぞれにネームプレートを贈呈していただき、ツアー開始となりました。

1 月 18 日の台湾クラブとの交流会は、台中のレストランでまずは、会員の皆様のおそろいの花のユニフォームでバスまでお迎えいただき、歓迎されていることを感じ、楽しい会となる予感がありました。

台湾クラブの会長 PAN HUI−JU さんが、「台湾ではまずは個人が親しくなるところから始めます」と歓迎の言葉をいただき、日本だけでなく、近隣の国々の BPW クラブとの交流の様子や台湾クラブのメンバーが様々な分野で活躍しておられること、ツアー参加者と会えることを楽しみに待っていたことやおじいさまが日本人であることなどあたたかい歓迎のご挨拶がありました。

台湾 BPW 潘慧如總會長（右）と
日本 BPW 北九州クラブ花崎会長（左）

堀内理事長と本会会長の花崎から、台湾クラブの今回のスタディツアーの見学地に対しての助力やホスピタリティに対しての感謝と、ツアー参加者が大学の研究者や市議会議員や個人として、それぞれの立場で台湾の女性の実状を学ぶことで新たな発見ができることを楽しみにしてきたことの挨拶がありました。台湾クラブのメンバーは CEO や個人事業主、芸術家もおられて幅広い分野での活動家の集まりであることを実感しました。

食事を交えての交流で、たくさんの台湾の果物やごちそうがありましたが、それぞれのテーブルでお互いの仕事や皆さんの活動に関することのお話に花が咲きました。時間も限られておりましたが、一番のごちそうは皆さんとのお話で、おなか一杯にして、皆さんのお見送りを受けて、レストランを後にしました。

台中 BPW の皆さんがお見送り

また、19 日は台湾クラブの副理事長で、台中クラブの前会長の MING−MING CHAO さんが CEO でもある「永信松柏園老人養護中心」施設の見学後に昼食会がありました。台中クラブの皆さんが見学もサポートしてくださったおかげで、より親密になっていましたので、私のテーブルでは、蔡英文総統とご友人で商業デザイナーの会員やピアノ講師の皆様とお話ができました。より個人的な仕事のお話やお子様たちが海外で活躍しておられるのを嬉しそうにお話される母としてのお話を伺うことができました。この会でも台中の名物をいただき、温かいもてなしを受けて気持ちよい交流ができました。

最終日の空港にも台中クラブの皆様がお見送りに来ていただきました。台中クラブの皆様のスタディツアーのサポートに感謝して、女性の社会進出、問題への取り組みを学んで帰途につきました。

**日本 BPW 北九州クラブ事務局長　髙見　佳代子**

## ジェンダー平等実現の方法論を求めて

### ～女性活躍推進の著しい台湾の事例を通して～

KFAW 企画の海外スタディツアーに参加するのは、今回が3 回目である。以前から企画の素晴らしいKFAW のツアーには参加したいとの希望を強く持っていた。今回は特に近年の女性活躍推進が著しい台湾ということで、その要因は何かを知りたくすぐに応募した。

台湾を初めて意識したのは、幼い頃、自宅居間の壁に貼られていた世界地図の上でであった。台湾は日本列島の最西南の西表島から100 ㎞ぐらいの距離にあり、太平洋の西の縁に弧を描くように連続的に続く島嶼は、さながら台湾へのステッピングストーンにみえた。太平洋の地殻に押しやられ、ユーラシア大陸にぶつかるのではとの幻想に怯えながら、その縁を流れる黒潮や対馬海流に世界の一体感を感じていた。不覚にも当時の政治的イキサツなど知る由もない私は、そのような地理的隣人意識から、美しいサツマイモの姿をしているその国に、親しみを強く抱き、夢を膨らませていた。父が子供たちに土に親しませようと自宅の庭の小さなスペースを割り当て、好きな花・野菜など自由に育てさせた時、私は迷わずサツマイモを選び、その蔓を植えた。あの台湾のような美しい形のサツマイモの収穫を夢見ながら。

長じて、米国からのスカラーシップアウォードで留学した米国大学院で、慣れない外国生活に戸惑っていた私に、最初に手を差し伸べてくれたのが同じ大学院で学ぶ台湾からの男子留学生たちであった。これが台湾の人びとに直接に触れた最初である。幼子が夢想した心優しい人たちがそこにいた。帰国後は、台湾については断片的にではあるが機会をみては実際に現地を訪れたり、台湾の人びとと交流したり、学会や研究会に参加したり、あるいは文献・資料に目を通すなど台湾理解を深めようと努めてきた。特に、1980 年代の中頃だっただろうか。初めて訪れた故宮博物院の所蔵品は強烈だった。圧巻だった。特別だった。その後、何回か訪れ70 万点以上にも及ぶと言われる所蔵品のごく一部でしかないのだが、それらを目にしたとき、それまで訪れた米国、ヨーロッパ、東南アジアの博物館とは異なった趣の展示品に強い衝撃を受けた。日本と同じ東アジア文化圏にありながら全く別の文化の側面を見たように思った。また、その博物院を通し、台湾の政治的側面の現実にも思考を走らせるようになっていた。一方、先住民の人たちのあの服飾の独特な幾何学的デザインとカラーコントラストのモチーフにも魅せられた。さらにまた、別の機会にスリランカ・コロンボの大通りで骨折し、歩行さえ困難だった私に帰国の途次、ずっとアテンドしてくれたのは、初めて会った台湾BPWの客家の女性であった。彼女は台湾で飛行機を降りた後も、私が無事に自宅へ帰れるようにと福岡空港のフロアー責任者にまで、すべての手配をしてくれていた。感激と感謝で一杯だった。

そして近年、台湾の人びととの交流が深まる中で、そのホスピタリティと女性の社会進出に感銘を受け、教えられてきた。これらの日本との差異はどこから生じたのであろうか。本ツアーに参加したのも、少しでもこのことを実感により学びたいとの強い思いがあったからであった。

台湾の女性たちと密に交流するチャンスとなったのは、2016 年4 月にオークランドで開催されたBPW International Asia-Pacific 地域会議で、BPW International twinning taskforce の元International 会長、日本BPW連合会会長、グレート台中クラブMing-Ming Chao 会長と国際委員長Helen Liao 氏と私とで、日本BPW 北九州クラブと台湾BPWグレート台中クラブと４年間のtwinningを提携してからである。台湾BPW国際委員長Shirley Chang氏から日本BPW 連合会国際委員長の私に、台中クラブとのtwinning のオファーがあったのはその1 年前であった。10 年前にも私が北九州クラブ会長であったときに他の国のクラブからtwinning のオファーがあったが、北九州クラブとしては、もう少し力をつけてからとお断りしていた。

台中クラブと北九州クラブの主な違いを設立、会員数、年齢層、職種でみると台中クラブ設立2007 年（北九州クラブ1988 年）、会員は当時54 名（北九州24 名）、年齢層は北九州クラブより平均10 歳以上若く、とくに職業構成は北九州クラブと殆ど変わらないが、台中クラブは企業人、デザイン・音楽などを含む起業家が多いことが特徴である。

台中市は2010 年に台中県を合併し、直轄市となり、人口は100 万人強から2017 年8 月現在約278 万人に膨れあがり、台湾中部の政治・経済・文化の中心の地位を獲得しており、活気に満ちている。

2016 年12 月には、北九州クラブ会員4 人が初めて台中クラブを訪問し、台中市の歴史的文化的スポットや茶園など農村部を訪問しながら日本統治時代の灌漑建造物などが見事によみがえっている観光地へ赴き、そこで台中会員と安らぎのひと時を過ごした。2017 年4 月には台中クラブから4 名が北九州クラブを訪問。その時twinning 目的の1 つである、両国の女性の地位向上のための学びとして、KFAW に北九州市のジェンダーの現状、北九州市・KFAW・ムーブのジェンダー問題への取り組みなどを丁寧に紹介頂き、台中会員に大いに喜ばれた。その節は大変お世話になりありがとうございました。この台中クラブ会員がKFAW を訪問し、学ばせていただいたことがきっかけで、このスタディツアーの計画の情報提供に台湾BPW・台中クラブが少しでも役立つことになったとすれば、これ以上の光栄はない。北九州の女性団体とのネットワークをKFAW を通じ、海外にまで広げるチャンスとなったということであれば、これこそ私どものtwinning 活動の目的実現の意義が深められたということである。国際交流のあり方の新たなステージモデルを作っていただいたということでもあり、台中・北九州クラブともどもこれ以上の喜びはないと感激・感謝しているところである。

さらに、同年6 月には台湾に、台湾BPW のAsia-Pacific地域 におけるすべてのtwinning クラブの9 クラブが韓国、タイ、フィリピン、スリランカ、日本から集結し、４泊５日で台北から台南までのすべてのクラブを訪問し、情報を交換し、交流を楽しんだ。このような壮大な計画をいとも簡単に実現に導くのが、台湾BPW のリーダーシップの凄さである。そういえば、台湾総統蔡英文氏は女性である。高雄市長陳菊氏・高雄市議会議長康裕成氏も女性である。1973 年台湾BPW の創設に関わった呂秀蓮氏は、陳水扁総統の下で副総統を8 年間務めた。氏は米国留学中から女性の地位向上に強い関心を持ち、退任後も、台湾女性の地位向上に尽力している。台湾BPW が2012 BPW International Asia-Pacific 地域会議を開催した際、呂氏は北京会議では触れられなかった今日的テーマ：女性、パワー、地球危機、エコ経済を謳い上げ、我々参加者を鼓舞した。国連ＣＳW60 に先立ちNY 市内で開催されたBPW International リーダーズサミットにも訪れ、私ども参加者70 人を励ました。このような女性リーダーを生む台湾をもっと知りたいと思った。

台湾BPW の構成
資料：2018 年 2 月 12 日
“International　Federation of BPW Taiwan”の HP

しかし、この台湾ツアー・BPW 会員との交流の中で、最も強く胸を打たれたのは、BPW 会員の“隣”人への思いやり・気遣い・配慮であった。紙数が限られており飛躍するが、これこそ、ジェンダー平等実現へのキーではないかと長い間思い続けてきたものである。女性活躍を推進し、女性の地位向上を図り、ジェンダー平等を実現し、女性が人としてその生を全うするには、女性の人権への思いやり・気遣い・配慮あってこそとの「思い」である。そしてそれは、ひいてはすべての人々の人権へ敷衍されるのではないか、との強い「思い」である。

このツアーは、日ごろの私のこのような「思い」を確かなものとしてくれたと思えるものであった。皆さま、ありがとうございました。

**日本 BPW 北九州クラブ会長　花崎　正子**

## 7　台湾視察を終えて

### アジア女性交流・研究フォーラム　理事長　堀内　光子

台湾視察を終えて間もない 2 月 6 日深夜、台湾東部に大地震（花蓮地震）が発生し、死者 16 人、負傷者 280 人以上という大きな被害が出たことに、お悔やみ・お見舞い申し上げるとともに、一刻も早い復興を願っています。台湾も日本と同じく地震の多い地域で、災害予防・復興という課題を共有しています。

女性活躍の象徴ともいえる蔡英文総統が率いる台湾を、1 月中旬の 4 日間、往復飛行時間を除くと、実質 3 日間の視察を行いました。短期間でしたが、中身の濃い、効率的な視察と思っております。事務方としては、かなりの準備をいたしたつもりではありますが、参加者の皆様方には、ご満足の得られないことや、改善すべきと思われた点もあったかと反省もしております。今後の視察の参考のために、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。この訪問には、計画段階から、台湾 BPW の皆さん、特に、副会長の趙明明さん（永信社福利基金会代表）に大変お世話になりました。心からお礼を申し上げたいと思います。趙さんのおかげで、同基金が運営している、先進的な、高齢者介護施設を訪問することができました。加えて、台湾 BPW の皆さんと、二度にわたる懇談会で、親交を温めることもできました。私たちが降り立った、台北桃園空港では台湾 BPW の皆さんがお迎えをしてくださって、私たち全員に、いかにも台湾らしい赤色のネーム・プレートをお贈りくださり、細やかな心遣い溢れる「おもてなし」を受けました。おかげで、私たちは、滞りなく視察を行うことができました。

「女性活躍」の状況・要因を探ることが、今回の視察の大目的でしたが、訪問の先々で女性自身のパワーの強さを感じとることができました。女性活躍の二つの大課題、女性のリーダーシップの発揮と、ワーク・ライフ・バランス、いずれもが、かなり進んでいる印象を受けました。国連機関でアジア太平洋地域を担当していましたので、同地域のほとんどの国・地域を訪れましたが、台湾とは空港での飛行機乗り継ぎ以外は無縁でした。国連では、1971 年の総会で、中国の人々を代表する国として中華人民共和国が認められ、国連創立時の原加盟国であった中華民国(現台湾)と交代したからです。台湾と外交関係を持つ国も、今や 20 カ国に過ぎなくなりました。日本も台湾とは非政府間の実務関係の維持という基本原則に立っています。日本台湾交流協会で、日台交流･日台関係や台湾情勢について幅広くお話を伺う機会がありました。最近日本の自治体間との交流が進んでいる、日本からの訪問者の増加などの特徴も伺いましたが、この視察を通じて、私たちも友好的な人々をはじめ食べ物等台湾の魅力を実感しました。

日本台湾交流協会水之江主任と記念撮影

台湾は、経済的に発展し、一人当たり GDP は、名目では、日本の方が高いですが、購買力平価で見ると、台湾の方が高く、世界順位も、台湾 22 位、日本 30 位と、先進地域です。台湾一高いビル、台北 101 観景台に上りましたが、その周りの高層ビル群は、発展の証といえます。台湾は、面積こそ九州よりやや小さい程度ですが、人口は 2300 万人と、オーストラリア、スリランカ並みを数え、世界の人口ランキング 55 位で、決して小さいといえません。経済関係では、中華台北（チャイニーズ・タイペイ）として WTO やアジア太平洋経済協力（APEC）のメンバーです。今、私は蔡英文総統の自伝を読んでいますが、経済グローバル化に伴う台湾の対外経済政策の進展がご自身の学者から行政官、政治家へのキャリアの軌跡と連動してわかりやすく描かれています（無類の猫好きということも本書からわかって、嬉しくなりました！）。

先ほども書きましたように、視察の大目的は、女性の活躍状況を探求することでしたが、台湾行政院が世界経済フォーラムと同様の手法で計算した台湾の男女格差は、日本より高順位の、世界 38 位(2016 年）のようです。（世界経済フォーラムでは台湾の順位を発表しておりません。）着実に民主化が進み、女性の活躍が進んでいる現況の要因は、時間的制約のため十分に理解したとはいえませんが、その状況には勇気付けられました。最終日の午前中に、個人的な知り合いと、政権与党・民進党の事務局の方や、前立法委員（国会議員）にお会いしました（というよりお茶を飲んだという方が正確かもしれません。）が、そこで、台湾では、女性自身が自ら変化を起こしているエージェントであることに改めて気付かされました。

最後に先住民･少数民族（台湾では、言葉の意味から先住民ではなく、原住民という言葉を使用しているようですが、「原住民」という言葉は、世界的問題を担当していた私にとっては、差別感のある言葉と感じているので、先住民･少数民族としています。）について。台湾には、16 民族があり、多様で、カラフルな文化がありますが、私の関心の高い女性と多様性民族文化については、次の訪問の課題にしたいと思っています。

台湾国家婦女館から寄贈されたアクセサリー

北九州市議会の女性議員の先生方も 4 名参加され、台中市では、同市の女性議員の方との懇談もなされておりますので、先生方の報告も楽しみにしています。何しろ、日本では、政治と雇用の分野で、男女不平等が著しいので。本訪問の参加者は、当フォーラムスタッフを含め、全員女性で、総勢 18 人でしたが、若者から熟年まで、また、様々なバックグランドを持った多様な女性の方々が参加され、多角的な視点から視察を行うことができました。参加された皆様方のご協力に感謝申し上げます。グローバル化が進む今日、特にアジアの隣国･地域を理解することは、ともに生きるために重要であるだけでなく、残念ながらアジアの中でも極めて遅れている、日本の男女共同参画･女性の活躍促進のためにも必要と思っています。今回の視察が、参加された皆様方の今後の活動、ひいては、本市であらゆる分野での男女の共同参画の進歩に向けての一助になれば嬉しく思います。

台湾 BPW の皆さんと懇談会

## ８　参加者コラム

### 女性が安心して暮らせる活力ある社会をめざして

この度は「KFAW台湾スタディツアー」に参加させて頂き、誠に有難うございました。特に私は、二日目に伺った台湾女性センターの中心「台湾国家婦女館」での研修で、台湾女性を取り巻いてきた過去の歴史や現状そして今後の課題が強く印象に残りました。

台湾女性の権利の主張やジェンダー平等を目指すこの施設は、毎年男女平等や台湾のさまざまな女性をテーマに展覧会を開催するなど活動は極めて活発です。台湾では、1950年代から60年代にかけ養女制度があり、社会的に男女不平等で、女子は家の手伝いや虐待を受け、学ぶこと・外に働きに出ることを認められていませんでした。余りにひどい現状を改革するため、女性達が立ち上がりました。

1970年代から80年代は女性の権利の復活が少し進み、女子も義務教育を受け就職はできましたが、30歳で雇止めされ、自立するのは大変難しいことでした。女性は経済的に自立できれば、政治の分野などにも、その能力を発揮でき、事実、台湾国内の女性議員の割合は3割を超え、能力のある信頼のおける女性は人気が高く選挙に強いとのことです。それに比べ、企業のトップの男性のほとんどが女性の能力などを認めていない場合が多く、女性は企業で地位を得るのが難しい状況でした。女性が差別されずどこにでも進出できるようにするために、女性団体の声と行政のかけ橋、パイプ役としてこのセンターが誕生しました。このようなセンターが機能しているので、まだまだ不足の点はあると思いますが、台湾の女性達は安心してたくましく暮らしていけるのだと思いました。

最後に、台湾にも少子化・高齢化・出生率の低下の問題があり、その上依然として労働賃金の格差、女性の再就職の難しさなどがあります。夫の賃金が安いから共働きが多く、また一旦離職すると再就職することが難しいので働き続ける女性がほとんどです。その結果、台湾はアジアで一番離婚率が高くなっており、結果子どもが増えないとのことです。このような負の連鎖を断ち切るため、女性が安心して働き生活していけるよう企業が「家庭の日」などを確実に設ける努力をしていただきたいと思います。夫婦や家族で力を合わせて家事や育児・介護などを分担し、やりがいや生きがいを持って日々の生活を送っていける社会であることが必要なことではないかと痛感しました。

**北九州市議会議員　木下　幸子**

台湾の女性運動の始まりは 1970 年代と遅いスタートですが、現在台湾女性の地位は急上昇してきたようです。台湾では日本に比べて女性が社会進出できやすい社会状況であるように思えました。まず、外食文化であること、そして家事・子育てを祖父母もしくは家庭に雇い入れている外国人女性労働者に任せられること。日本でも女性の家事負担を男性と分け合い、女性の社会進出がしやすくなってきていますが、まだまだ男性の家事参加は難しい社会です。日本ももっと外食文化を取り入れたり、女性の家事負担を少なくすれば、もっともっと女性の社会進出ができるのではないでしょうか。

また、台湾女性の地位向上のために貢献されている活動団体 BPW の女性の方々にお会いして、台湾女性の女性運動に対する情熱、活動力の強みを感じました。台湾女性がこのパワーを持って女性運動を進めてきたことも、女性の地位が急上昇した要因ではと思えました。

**今井　好子**

全般的に、台湾の働く女性たちは自分の仕事を全うしているのを強く感じました。

政権の変化や養女制度など、複雑な背景があったからこそ一人一人の女性が強い信念を持って生きていく術を持っているように思います。日本の女性は弱みを見せる。働く女性全てではないけれど、最後の最後は逃げ腰で責任転嫁なところがあるため、なかなか高い地位に就くことができない。問題が外れるかもしれませんが、ただ高みを目指して仕事をしているのが日本の女性、仕事の本質を見つめて極めてリーダーになっていく台湾の女性・・・そんな風に感じました。

高齢者施設で支援員の職員さんに伺ったお話ですが、ここでは社長夫人自らが従業員に仕事を教えているそうです。その場所に限らず、どこでもトップの方は、いつもさりげなく従業員のところへいるようで、隔たりのなさを痛感しました。お互いがお互いの問題を分かり合えるから、子育て世代に必要なこと、高齢者支援に必要な意見を出すことができ、問題視し、解決できているのではないかと思います。離婚率が高いことは残念なことかもしれませんが、考え方を変えると、それだけ自分の意志をしっかりと言い、生きていく力があるということで、素晴らしいです。

見学させていただいたのは、たぶん一部のより優れた場所だったのでしょうが、現地に行き、現地の方と触れ合い、気質を思うと、ベースはやはり自分をしっかり持っている、そんな風に感じました。

このツアーで新たな見解が深まりました。心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

**守恒市民センター館長　小牟田　尚美**

近年、台湾女性の社会進出が大きく飛躍し、アジアの中では上位に位置します。残念ながら日本は出遅れているようです。今回、台湾女性の社会進出が大きく進展した背景などに興味を持ち、このツアーに参加させていただきました。

台湾では、1970 年代までは、女性が自由に発言することが難しかったようです。その後、1980 年終わり頃から少しずつ「女性の権利」、「男女平等」、「仕事における男女格差を無くす」などの権利擁護を目指し、女性の社会進出を後押しする女性団体や NGO が設立されます。現在では、国と一緒に女性の権利を常に意識させるようなテーマを毎年掲げ、「社会福祉」、「警察」、「医療」のバックアップのもと差別されない法律づくりに頑張っているそうです。

女性の社会進出において、必ず話題になるのは家庭との両立です。政治経済などに進出している女性たちは「家事」、「育児」、「介護」といったいわゆる女性の仕事をどのように行っているのでしょうか。台湾の女性たちは、主に女性の外国人労働者を雇用し、仕事と家庭の両立を図っているそうです。このような仕組みは、経済力のある一部の女性だからこそできることで、一般の女性達の家事負担は日本と同様かもしれませんが、台湾における女性の社会進出を力強く押し上げているのではないでしょうか。

これは余談ですが、この間「『家事のしすぎ』が日本を滅ぼす」という新聞記事がありました。その内容は、「男女共同参画」といっても、家庭内での夫の家事負担は各国平均の半分も満たしていなく、女性の負担は未だに大きいというものでした。

シンガポールでは、「朝食も夕食も外で済ます人が多いが、子どもの学力は高く、平均寿命も日本と差がない。だから、これからも夫の家事参加を促し、それでもできない時は外部化してもよいのではないか」というものでした。私たちの年齢では少し抵抗がありますが、これから社会進出する女性達にはこのくらいの思い切りが必要な時代が来るのかもしれません。

**久保　こま代**

私は、平成 27 年 3 月より約 2 年間、北九州市議会初の女性副議長を務めさせていただきました。時あたかも、平成 28 年 4 月より「女性活躍推進法」が施行ということで、「女性活躍をどのように推進していくか」が大きな課題となっていました。

このような中、本市ではいち早く「女性の輝く社会推進室」を設置、また、国・県・市とワンストップで女性の就労・子育てとの両立支援・キャリアアップ・創業等を支援する「ウーマンワークカフェ北九州」が創設されました。また、女性議員全員（8 名）で「女性活躍推進に向けた意見交換会」（略称・女活会）を発足させ、企業担当者、市民センター女性館長はじめ各方面の皆様と意見交換をさせていただき課題等を探ってきました。今回の視察で大変お世話になった「BPW 北九州」の皆様とは副議長時に縁を結ばせていただきました。「女性の輝く社会づくり」が私のライフワークの一つと考えています。

昨年 12 月に、KFAW の柴田専務理事より今回のスタディツアーの話を伺い、また、暮れに開催された「北九州ゾンタクラブ・チャリティーパーティー」でご挨拶された駐福岡台湾戎総領事が「台湾の女性は元気一杯、今や男女共同ではなく、女男共同参画社会だ」等の趣旨の話に感銘し申し込みました。

1 月 17 日から 20 日までの 3 泊 4 日のツアーで、KFAW 堀内理事長はじめ、大学教授、女性議員、BPW 北九州、市民センター館長、個人で参加した若い方等々多彩のメンバー（18 名）で、「日本台湾交流協会」「台湾国家婦女館」「婦女新知基金会」「保育所」「高齢者施設」「BPW 台湾との懇親会」等パワフルに勉強してまいりました。

日本は 2017 年の世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数は 144 か国中 114 位と低いのに対し、台湾は 38 位と高く、クォータ制の導入により女性議員の割合は 113 名中 34 名で 3 割に達し、2016 年には初の女性総統が誕生しました。また、経済面においても女性経営者の割合は過去最高の 36.2%に達しました。ここまでの道のりは平坦なものではなく、昔は養女制度があり虐待、家庭内暴力があり、女性の地位は大変低かった。また、職場においても若年定年制（30 歳）があり解雇された。いろいろな男女差別がある中、女性の権利を守るために、女性であるがゆえに受けなければならなかったジェンダー不平等の問題に立ち向かっていった歴史があり、勝ち取ってきた壮絶な歴史を学びました。また、その歴史は「婦女新知基金会」で説明をしてくれた方も 30 歳代と若かったように、若い世代に脈々と受け継がれていることを実感いたしました。私は議員という立場なのでクォータ制度の導入により変わりつつある政治文化について興味があり今後勉強していきたいと思いました。

簡単な感想文になりましたが、2月の定例会では今回のスタディツアーを踏まえ女性活躍について質問したいと思っています。また、報告会も開催されるようですので楽しみにしています。

今回、堀内理事長はじめ事務局の皆様には大変お世話になりました。また、台湾 BPW クラブの皆様には、空港の送迎、懇親会・昼食会と心温まる歓迎をいただき感謝しております。これも日本 BPW 北九州クラブの皆様のおかげと感謝申し上げます。最後にご一緒させていただいた皆様のご活躍をご祈念申し上げます。

**北九州市議会議員　山本　眞智子**

今回、初めて台湾を訪問して、台湾の女性のエネルギッシュな姿がとても印象的でした。訪問先で出会った方々は皆、生き生きとして活気と自信に満ちあふれ、自分らしく輝いているように見えました。

弱い立場・不利な状況にあった歴史的背景や、そこからさまざまな取り組みがなされ、自分たちの力で制度を変えていき、また教育によって自らの能力を高め、女性のというよりも人として一個人の存在を確立してきたのだと、話を聞けば聞くほどに台湾女性の意識の高さ、意志の強さを痛感し、女性総統の誕生も納得がいく結果だと思いました。

家庭において共働きが当たり前と考える若い世代は、おそらく男性だから、女性だからという性別の意識は薄く、お互いが同じ立場・ラインに立って、尊重し合い協力し、支え合っているのではないかと思いました。

今回のスタディツアーでは、いろいろな刺激を受け、女性が自立していくことがいかに重要か考えさせられましたが、日本という国、技術や環境、政治、気質などを外からの視線で捉え、社会や自分自身を見つめ直すいい機会となりました。今回学んだ多くのことを、ひとつずつでも活かしていき、自分のやるべきことは何か、できることは何か、模索していきたいと思います。

**若山　理恵子**

北九州市が先進都市に女性を派遣して、男女共同参画などについて学ぶ「女性リーダー国内研修」に参加して６年。市民センターでの業務に追われ、学ぶ機会も時間も取れず社会から取り残されたような、ちょっと焦りも感じていた晩秋…。そんな時に１通の封書が届いた。中身は「台湾スタディツアー」の案内だった。勤務地の会長や職員にも背中を押され、思い切って参加することにした。久しぶりの自分の時間、海外。ワクワクするけど不安もあり、複雑な気持ちで福岡を飛び立った。総勢 18 名。初めましての方ばかりとは思えないくらい、あっという間に打ち解けていった。日頃出会えないような人たちとの会話は、新たな気付きもあり、これからの仕事や活動に大いに参考になった。

私が訪問先で一番楽しみにしていたのは台湾国家婦女館である。日本でいうところの国立女性教育会館（NWEC）。団体の活動について説明を聞いた。台湾のジェンダーギャップ指数は 38 位。女性センターが各県にあり、地方の性質を鑑みながら、男女共同参画について指導、提案をしているが、情報の量、伝達の速さにも差があり、男女共同の意識が低い地域もあるとのこと。では、日本はどうなのだろう。日本のジェンダーギャップ指数は 114 位。義務教育や健康など基本的な事項については男女平等は確立できているが、女性の社会進出や評価については、各国に比べ差別があるということらしい。市民センター館長同士で話をしても、地域によっては女性軽視発言が多く、地域活動に女性が参加しにくく、役職からも排除されることが多々あると聞く。男性、女性それぞれの良さを認め合い、ともに地域活動を推進していくことがよりよい地域づくりにつながるのではないだろうか。「自分にできることは何か」を考えながら、男女共同参画社会実現という目標を持って、仕事や地域活動に携わっていきたいと思っている。最後に、ツアー開催にあたりご尽力いただいた事務局の皆さまはじめ、すべての方々に感謝しています。ありがとうございました。

**中井市民センター館長　土田　トシエ**

「台湾は女性の総統が昨年誕生し、政治にクォータ制を導入したことで女性議員の割合が多く、女性活躍の地域なので一緒に参加をしてみない。」と先輩に声をかけて頂き、台湾スタディツアー2017『台湾に学ぶ女性のエンパワーメント』に、今回初めて参加させて頂きました。

北九州市では「女性の輝く社会推進室」を創設し、市職員の女性幹部の推進、登用、また「ウーマンワークカフェ」では女性の就業・創業支援を行っておりますが、日本全体で見ると 2017 年の世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数は 144 カ国中 114 位。まだまだ働く女性の取り巻く環境は厳しいものがあります。今回のツアーでは台湾の女性たちの活躍、働く女性たちを支える仕組みをさまざまな角度で学ばせていただきました。

このツアーで一番の衝撃は、１９９６年以前の台湾の女性の地位は低く、養女制度、家庭内暴力、性差別など、昔から女性が活躍している地域ではなかったということです。１９８７年戒厳令が解除され台湾の民主化が始まり、女性が少しずつ社会進出していき、社会的に守られるようになりました。政治にも参加できるようになり、現在女性国会議員も 113 人中 43 人と 38%を占め、県長・市長も 228 人中 36 名が女性。地方では３割以上が女性政治家というお話を伺いました。

日本と台湾は高齢化・少子化・未婚化とすごく似ている部分も多いと感じる一方で、日本で女性が社会進出をしようとすると男性と違い何かしらの弊害が伴いますが、台湾では男性にも家事を手伝ってもらい、政府が企業に「家庭の日」を設けるよう奨励しているということでした。またインドネシア、ベトナムからも外国人労働者を迎え家政婦として雇用し、夜市など安くて手軽に食べられる外食文化の発展も女性の社会進出を後押ししているのではないか。と感じました。

台中市議会議員の皆さんと北九州市議会議員

台湾の女性活躍の背景を学び、女性の人権が侵害され立ち向かっていった歴史、何年にもわたる努力が今の女性活躍を導いていったのだと思います。日本では遅れている分野ではありますが今回のツアーで学んだことを活かしていけるよう、今後ともさまざまなことを学び経験しながら男女共同参画社会実現のため頑張って参りたいと思います。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

**北九州市議会議員　冨士川　厚子**

今回参加させていただいた台湾スタディツアーでは、女性のパワーを感じ、女性の権利や社会進出について考える大変良い機会となりました。

台湾では、短い期間で多くの女性が社会進出を果たしたと学びました。日本でもたくさんの方々が女性の社会進出について尽力しておられるとは思いますが、その努力がありながらも台湾に比べて日本での女性の社会進出がなかなか進まない点について、今回のツアー全体を通して私が感じたことや考えたことを述べたいと思います。

女性の社会進出には、職場と家庭の二つの要素があると思いますが、今回のツアーでは家庭面のサポートについて学ぶ機会が多かったように感じます。特に印象に残っているのは、台湾の家庭では外食が主流であり、女性が自宅で家事をする必要がないことも女性の社会進出に影響しているのではないかという意見です。

日本において、家庭面での女性の社会進出の邪魔をしているのは、日本人男性の女性の好みも理由の一つになっていると感じます。男性は今でも理想の結婚相手として、家庭的な女性を挙げる人が多くいます。このことは母親が専業主婦となっている家庭が多いことや、共働きでありながらも、家事を全てこなす母親が多いため、その姿を見て育った子どもたちは、女性が家事や育児をするのが当たり前だと思ってしまうことが一つの理由になっているのではないでしょうか。保育士の母に聞いたところ、今でも子どもたちのおままごとでは、お父さん役の子は仕事に行き、お母さん役の子は家事や育児をしているようです。子どもたちのおままごとでお父さん役の子も、家事や育児をするようになる日が来るように、小さい頃からの教育も必要になるのではないかと思いました。また、それに伴い今後は、女性だけでなく男性の意識改革も必要となってくると強く感じました。

今回学んだ多くのことを生かし、私がこれから就職する会社で、女性が働きやすい環境づくりに携わる機会があれば幸いです。

最後になりましたが、今回のツアーでは私が最年少ということで、参加しておられた方々から大変親切にして頂いたことに感謝致します。最初は知り合いもおらず、少し不安でしたが、皆さんに優しくしていただき、とても楽しく実り多き旅行となりました。ありがとうございました。

**權藤　麻記子**

## 台湾における女性の権利獲得の歴史に学ぶ

経済発展めざましい台湾で女性の社会的な地位はどうなっているのか、またジェンダー平等はどのくらい進んでいるのか学ぶ絶好の機会と思い、今回の台湾スタディツアーに参加しました。初の台湾訪問ということで不安でしたが、事前勉強会で台湾の概要や女性を取り巻く状況について知識を得るとともに参加者の顔合わせもできたので、安心してツアーに臨めました。

今回、最も印象に残ったのは台湾における女性の権利獲得の歴史で、台湾国家婦女館を訪問した際、陳研究員から詳しい話を伺いました。台湾国家婦女館は、台湾政府がジェンダー平等を推進するために設置した女性センターで、財団法人女性権利促進開発基金会によって運営されています。各県にも女性センターが設置されているそうです。

台湾においても女性の地位は日本と同様、低いものでしたが、戒厳令が解除された翌年の 1988 年から民主化政策が開始されたことで女性解放運動が活発になるとともに、政府がジェンダー平等を主要政策に位置付けたことで女性の権利保障が大きく進展したそうです。1996 年に民法改正、1997 年に性暴力防止法、1998 年には DV 防止法が制定され、さらに 2001 年には男女平等の労働法である両性工作平等法、2004 年にはジェンダー平等教育法が制定されました。政治分野でもクォータ制の導入によって女性の国会議員比率が３割を超えたそうです。（2012 年の立法委員選挙で 33.9%）

台湾における女性の権利獲得は、民主化をきっかけとして長い間抑圧されてきた女性たちが声を上げ、女性解放運動が拡大し、政府もそれに呼応したことでジェンダー平等政策が推進されてきたように思います。日本においてもクォータ制の導入等により女性の国会議員が増えれば政府に対し、ジェンダー平等政策を強化するようプレッシャーをかけることができるのではないでしょうか。

１月中旬の台湾は北九州よりも温かく、とても快適に過ごすことができました。台湾の人びともこの温暖な気候のように開放的で明るい印象を持ちました。今回のツアーの中で台中 BPW クラブの皆さんと交流する機会がありましたが、心のこもった熱いおもてなしに感激しました。最後になりますが、今回のツアーを主催された公益財団アジア女性交流・研究フォーラムに対し、心より感謝申し上げます。

**北九州市議会議員　森本 由美**

## 台湾国家婦女館を訪問して

初日に日本台湾交流協会で台湾に関するレクチャーを受けた後、２日目に「台湾国家婦女館」（以下、国家婦女館）を訪問しました。

国家婦女館は、日本で言えば埼玉県武蔵嵐山にある「国立女性教育会館（ＮＷＥＣ）」のような施設。２００８年３月に女性権益促進委員会によって設置され、現在は女性権益促進開発基金が運営しています。

台湾には各都市に市民等を対象とするムーブのような女性センター（男女共同参画やジェンダー平等を推進するための施設）があるそうですが、国家婦女館はそれらのセンターの中心的な存在であり、館の担当者は自らの施設の役割を「政府と国民の架け橋となり、政府の考え（政策）を国民に届ける」と力説しました。

台湾における男女共同参画の推進手法は、各都市の文化の違い（都市部、農村、漁村等）を踏まえて各都市で異なるということですので、国家婦女館は、例えば「有効的な推進方法の導入」といったようなことに関しても、各都市（センター）の指導的な立場にあるのではないかと感じました。

館内には、会議室、事務室の他に、図書室や展示コーナー等があり、台湾先住民の工芸技術をプロのデザイナーと組んで商品化した民芸品等を展示販売するスペースもありました。国家婦女館は、展示のほか、各都市間のネットワーク作り、国際交流、研修、研究（女性史等）、データ収集、統計など幅広い機能を有しており、ナショナルセンターを自負する思いが伝わってきました。

高齢化や女性の社会進出を背景に、台湾では、インドネシア、フィリピン、ベトナムなどの国から多くの外国人労働者（約２６万人）を受け入れています。彼らが在宅で家事労働に従事することが台湾女性の社会進出を進めたわけですが、生活習慣の違いによるトラブルもあり、外国人労働者（また外国人妻）の権利をどう守るかが関心になってきています。

外国人労働者の受け入れ状況は日本と異なっているので、そのあたりの状況は違うと思いますが、①男女共同参画に係る男性へのアプローチとしては「一方的な啓発ではなく、なるべく生活面、具体的な面から、わかりやすく伝える」ことが大切であること、②家庭と仕事の両立を進めるため、母の日の設定、奨励金、表彰などの取り組みを行っていること等、日本と同様の課題を抱え、新しい価値観の創造へ踏み出しているところは同じだなと感じました。

**（公財）アジア女性交流・研究フォーラム専務理事**
**北九州市立男女共同参画センター所長　柴田　邦江**

### 感謝の言葉

今回のスタディツアーでは、14 名の市民の方に参加していただきました。凝縮された 4 日間のスケジュールを共にする中で、年齢や職業の垣根を越え、皆さんと親しくなれたことはなによりの喜びでした。参加してくださった方々、ありがとうございました。

また今回のツアーでは、日本台湾交流協会台北事務所、台湾国家婦女館、婦女新知基金会、臺中市公設民營清水托嬰中心、永信松柏園老人養護中心など台湾の多くの方々のご協力をいただきました。そして台湾・台中 BPW の会員からは空港での出迎え、見送りのみならず、懇親会や施設訪問で心尽くしのもてなしを受けました。人を思いやり、歓迎するとはこういうものなのか改めて教わった気がします。

関係者の皆様に心より感謝いたします。（事務局）

KFAW 台湾スタディツアー2017　報告書
発行　（公財）アジア女性交流・研究フォーラム
〒803-0814　北九州市小倉北区大手町 11-4
TEL：093-583-3434
FAX：093-583-3434
URL：http://www.kfaw.or.jp

平成 30 年 3 月発行

本誌の無断転載・複写を禁ずる